

---

# 他人のお話

飯野こゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

他人のお話

### 【Zコード】

Z2347E

### 【作者名】

飯野こゆみ

### 【あらすじ】

私は「ごく平凡な女の子だったと思う。でもどういう訳なんか他人の恋のタイミングポイントに鉢合わせする事が多いような気がする。それはただ単に都合の良い友達?といふか、当たり障りのない子だったかもしれない。私が出会った恋のお話を綴つてみたいと思います。

## 妄想の強い女の子

私は「ぐぐく」平凡な女の子だったと思つ。でも「ううう」訳なのだから他人の恋のターニングポイントに鉢合わせする事が多いような気がする。それはただ単に都合の良い友達?といつか、当たり障りのない子だつたかもしれない。私が出会つた恋のお話を綴つてみたいと思います。

最初に思い出すのは中学の時のミカだ。

私達の中学校は2つの小学校から入学する。

ミカは隣の小学校の卒業生だ。

でも中学1年の夏休み、我が家の前の田んぼを埋め立てて出来た建売住宅に引越してきた。

ミカは真面目な学校の中に何人かいる不良に憧れる子だった。私を格下だと思っていたのだろう、いつも

「あたしつてさあ」と始まり

タバコ止められないんだよねえとか、あの先公が気に食わないなどと言つてきた。

私はいつも

「ううう」

と聞き役専門で、ミカは、

あんたには「んな事話しても解らないよねえ。

これが口癖だつた。

そのミカに好きな人がいた。

ミカと同じ小学校だつたかつくんと呼ばれるその男の子は背も高く、少年野球をしていたそうで、人当たりのよさそうな柔らかい感じのする男の子だつた。

そんな彼を好きな子がもう一人、レイちゃんだ。

2人はいつも当の彼を差し置いてライバル心むき出しで、凄いバトルを繰り広げていた。

土曜のお弁当どっち食べてもらつか競争、一緒に帰るのどっちか競争、etc. 周りは冷めた目でみていたと思う。

そんなある日の事だつた。ミカが仕掛けた。

「あつちゃん、今日の放課後少し付き合つてくれない？」

そつは言つが強制的に放課後連れてこられたのは、彼が中学で入った卓球部が練習している体育館。

「ちよつとここで待つてて」

の言葉を残し彼女は体育館の入り口へ、そして彼を呼びよせた。ミカは言った。

「私、こんな状態もう嫌なの、私はかつくんが好き。かつくんは私の事どう思つてるの？」

と。でも彼は一言も発しなかつた。  
といふか、固まっていた。

ミカはまた

「お願い、好きか嫌いかはつきり言つて！」

その問いに彼はしばし無言だったが、暫く続いた沈黙の後

「 もういい。」

それはそれは蚊の鳴くようなとても小さな声だった。

ミカは

「 なんて言ったの? もう一度大きな声で言って」と

私は吃驚した、勇氣があると。

すると今度は彼が意を決したように

「 もういいだ

無言も沈黙もなく今度ははつきりと聞こえた。

そして、じゃあといつて体育館に戻ってしまった。

ミカはとこうと、田に涙を浮かべながら一際大きな声でこう叫んだのである。

「 本当の事言つてよーー。」

と。

だから言つてゐるじやんと強く思つたが、ミカの脳内ではこうことと  
変換されているらしく一つの答えが導きだされた。

私を見ながら、

「あつちゃんがいたからだよ、せつとかつくん恥ずかしくつて本当  
の事言えなかつたんだよ。」

どれだけポジティブなんだよ。

そんな風に考えられる彼女が少しだけ羨ましくもあるよつはない  
よつな。

人を想うことは良いことだと、それは解ります。  
でも相手の気持ちを無碍にしてはいけないと思つ。

この場合は思いを告げた彼女を振つてしまつた彼のことではなく、  
告白され、先輩も沢山いる体育館の隅で頑張つて断つたにも関わら  
ず、その言葉を無かつた事にしてしまつ彼女。

あつとミカにはこの彼から断られるシナリオは無かつたのでしょうか。

彼には彼女ができた。

それはミカでもレイちゃんでもなかつた。

小学校の頃から好きだつた子だと。

その後の中学生生活で彼と彼女が話しをしていの姿を見たことは一度  
もなかつた。

## モテル女の子

次は私がバイト先で出会った女の子である。

私は高校3年生の時、学校近くのガソリンスタンドでバイトを始めた。

そこへ中学の時の一つ上の先輩が入ってきた。

中学の時は全く違う雰囲気になっていた彼女。

私は直ぐに気がついたが向こうは全く気がつかなかつたようで。その彼女が話す”彼”的話がとても面白くて私は先輩に自分が同じ地元だと言う事は言わないで置く事にした。

そう、彼女もやつぱりどんでもない妄想壁の持ち主だつたからだ。

私の通う学校は地元の駅から3つほど離れた場所にあった。

私は学校帰りによつていていたのだが、その先輩、ゆき先輩はなんのゆかりもないこのスタンドに取つたばかりだといつ車の免許をひらひらさせながら軽自動車に乗つて通つていた。

真つ黒で太いアイラインに紫色のアイシャドー、着てくる洋服もいかにも……

これ以上はゆき先輩の為にも私の口からは言わないのであります。

「昨日彼がさあ～」

そんな風にいつも彼の話をするゆき先輩。

夜中ドライブしていたら、どうしても私の作ったオムライスが食べたいって言つてさあ～。

私がもうこいつてこいつてるの」しつこくて、今日は寝不足だよ。

たまに、Hな話も交えながらいかに自分が彼に愛されているかを語つていた。

バイト仲間は

「へー」だの「ふーん」だのそれで、それでと言つて彼女を煽る。みんな面白がつているよつだつたけど本人だけは大真面目に彼の事を語つている。

そのうちに

「彼がどうしても私と離れたくな」とつて言つて

といいあげくの果てには

「うちの庭にプレハブがあつて、とうとうそこに引越してきたよ。まいっちゃんねーでも今までだつて殆ど私の部屋に居たんだから同じなんだけど。」

と言い切つた。

でも私知つてるんだ。

ゆき先輩の妹は私の中学の部活の後輩で、同じ高校だつたの。

朝の電車で一緒になつた時、

「お姉ちゃんと彼、仲良さそうだね」

つて聞いてみたら

「えつー先輩（私の事ね）何言つてるですかーうちの姉貴に彼なんているはずないじゃないですかあー」  
つて大笑い。

そこで更に

「だつて庭のプレハブに引越してきたんじゃないの？」  
つて聞いてみた。返ってきた返事は

「うひの庭にプレハブなんてないですから。それにバイト以外毎日家でゴロゴロしてるんですから彼なんているはずないってーどこからそんな話がでたんです?」  
つて笑いが止まらない妹さん。

「こまできたら可哀相になってしまって、  
「ちょっと噂をね」と。

”お姉ちゃんがでじいろだよ”とはとても言えなかつた。

そしてまた、彼女のお惚氣話を聞く毎日。  
多分、大げさに言つてるだらうなあ。

なんて思つていたけど、彼そのものが居なかつたとは思わなかつた。

暫く経つたある日、他のバイトから、ゆき先輩は私と同じ中学だと  
いうことを聞いたらしい。

そのせいなのかどうだか解らなかつたけど、それから何日もしない

でひつそりバイトを辞めてしまつた。

私もみんなもちょっととの間寂しくなつたことは彼女は知らない。

今どうしているのかな?とふと思つたりして。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2347e/>

---

他人のお話

2010年12月19日14時11分発行